

「我らのインディアンコーン」 ——トウモロコシはいかにしてアメリカの穀物になったか¹

佐藤 憲一（筑波大学非常勤講師）

はじめに——トウモロコシ²を領有する

1620年の入植直後から独立前夜に至るまで、英領北米植民地は一群のトウモロコシ言説を生み出した。その起源は、1492年11月6日、クリストバル・コロン（Christobal Colon）が、キューバの内陸探索から戻った2人のキリスト教徒から受けた、次のような報告にまで遡る——「土地は非常に豊かで良く耕されており、例のニアメスや、^{アアス}豆や、我が国のものとは非常に異なる^{アアス}そら豆^{アアス}が^{アアス}つくられていた。あの^{アアス}どうも^{アアス}ろこ^{アアス}し^{アアス}も^{アアス}あった」⁴。スペイン語の「パニツ」は、「キビ属の雑草」を意味し、これは英語の“panic grass”に相当する。しかし、訳文に示されているとおり、ここでコロンが言及しているのは、パニツではなくトウモロコシである。同じ日の同じ出来事を記したラス・カサス（Las Casas）の報告には、こうある——「土地の肥沃さについては、2人の使者はその素晴らしさを語り[中略]そら豆に似た豆類と、インディオがマイースと呼んでいる穀類、すなわちキビは、たくさん目についた」⁵。コロンが類推から「パニツ」と呼び、またラス・カサスの報告においては「マイース」と呼ばれている植物こそが、今日我々の知るトウモロコシに他ならない。

先住民の用いる呼称“mahiz”は、早晚スペイン語に取り込まれ、それが“maize”という綴りに姿を変えて英語にも取り込まれてゆく。『オックスフォード英語辞典』によると、“maize”が英語で用いられるようになるのは1585年のことである。1621年にいたると、英語は“maize”に“Indian corn”という別称を与え、その領有権を強く主張し始める。それは、ピルグリム・ファーザーズがプリマス植民を開始した1年後のことである。急場しのぎの食物として重宝されたインディアンコーンは、植民者の体内に取り込まれると同時に、英語という言語体系の内部にも取り込まれてゆく。“mahiz”が、“maize”に姿を変え、さらに“Indian corn”として英語化してゆく過程は、イングランドが新大陸に進出してゆく過程と完全に重なっているのである。

コロンの使者による「発見」から300年余を経た19世紀初頭に、アメリカ合衆国で刊行されたノア・ウェブスター（Noah Webster）の『アメリカ語辞典』は、“corn”を次のように定義している⁶。

イギリスにおいて corn は一般的に小麦、ライ麦、オート麦、大麦を指す。合衆国においてもこの語はイギリスと同様に一般的な意味も有するものの、習慣ではもっぱらトウモロコシを指す（by custom, it is appropriated to maiz [sic]）。

この定義は、独立後のアメリカにおいて、穀物 (corn) とトウモロコシ (maize) との間にある種の提験的な関係が成立していることを示唆している。換言するなら、アングロ・アメリカのトウモロコシに対する領有権は、19世紀の初頭においてすでに確固たるものとなっているのである。

19世紀初頭に至るまで、アングロ・アメリカのトウモロコシに対する領有権は、2度確立される。いや、より正確には、それはいったん確立された後に更新されるといったほうがよい。最初の領有権を支えるのはウィリアム・ブラッドフォード (William Bradford)、ジョン・ウインスロップ (John Winthrop)、ジョン・ウインスロップ・ジュニア (John Winthrop, Jr.)、コットン・マザー (Cotton Mather) らであり、その更新に先鞭をつけるのはベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) である。これまで論じられたことはなかったが、フランクリンは、印紙税法を巡るイギリス本国と北米植民地の論争のさなかで、トウモロコシが「アメリカの穀物」として出来る言説的枠組を、彼にしか想像のつかないようなやり方で、準備したのであった。

入植直後から独立前夜に至るまで、物心両面から〈アメリカ〉の存立を助けたトウモロコシを、フランクリンはどのような口口で「アメリカの穀物」に仕立て上げたのだろうか。本論考は、イギリスの北米入植以降に生産された一連のトウモロコシ言説に着目しながら、トウモロコシに対するアメリカの領有権が確立されるに至るダイナミズムを検証し、新大陸原生の穀物が〈アメリカ〉そのものとして立ち上がるひとつの瞬間を捉えようとする試みである。

1. 「我らのインディアンコーン」

イギリスから北米に植民した人々は、植民当初、自ら「インディアンコーン」と名づけた穀物を重宝した。プリマス植民地を率いたウィリアム・ブラッドフォードの記録によると、植民者たちは、移民後に本国から持ち込んだ穀物の栽培を試みたものの、それらは十分な食糧を提供するまでには生育せず、植民後最初の冬が終わると原住民からトウモロコシの耕作法を学んだとされている⁷。また、1630年にマサチューセッツに移住したピューリタンたちは、移民直後から1634年までの間に原住民から2度、合計600ブッシェル⁸ものトウモロコシを購入している⁹。この一団を率いたジョン・ウインスロップは、英語で“Indian corn”という語句を最も早い時期に使用したひとりでもあるが、彼の「日記」のなかには、ボストンに隣接する区域に住むインディアンの酋長チカタボット (Chikatabot) から、「大樽1杯分のインディアンコーン」を上納品として受け取ったことも記録されている¹⁰。彼はまた、1630年に、これからアメリカに渡る妻にあてた手紙に次のように記した¹¹。

私たちはここで楽園にいます。牛肉や羊肉には事欠きますが、(ありがたいことに) それらは必要ではないのです。我らのインディアンコーン (our Indian corn) がすべての

要求に応じてくれるのですから。

「我らのインディアンコーン (our Indian corn)」。妻の移住を促すためにウィンスロップが発したこのひとつは、当時の植民者にとってトウモロコシが食料として貴重であったことを裏付ける。トウモロコシがあれば新大陸への移民に対する不安と、移住後の空腹とが、ひとところに解消される——彼らのトウモロコシに対する占有欲はこの一点に根ざす。

これまでしばしば指摘されてきたように、原住民から何らかの形でトウモロコシの施しを得ない限り、英領植民地は移民後最初の冬を乗り切ることが出来なかったであろう¹²。この意味において、今日のアメ리카合衆国は、トウモロコシなくしては存立し得なかった、と言っても過言ではない。スペイン人によって当初「マイース」と呼ばれた穀物は、後にイギリス人によって「インディアンコーン」という別称を与えられ、さらにそこに「我らの」という限定詞が付加されながら、アングロ・アメリカを胚胎し、その体内に吸収されてゆく。

本国の内乱を経て北米植民地が一定の安定をみる 1660 年以降、ニューイングランドのトウモロコシに対する依存度は上昇する¹³。トウモロコシに対する自然誌的な興味が現れるのもこの時期のことである。1678 年、ロンドン王立協会の機関誌『フィロソフィカル・トランザクションズ』(*Philosophical Transactions of the Royal Society of London*)は「ウィンスロップ氏から寄せられた、トウモロコシの種類、耕作、用途について」と題する記事を掲載する¹⁴。この「ウィンスロップ氏」とは、先に触れたマサチューセッツ植民地の指導者ジョン・ウィンスロップではなく、その長男であるジョン・ウィンスロップ・ジュニア (John Winthrop, Jr.)¹⁵ をさす。ニューイングランド植民地最初の王立協会員としても知られるウィンスロップ・ジュニアは、1661 年 9 月から 63 年 3 月まで、当時総督を務めていたコネチカット植民地の特許状を更新するためにロンドンに滞在していた。1662 年 12 月 17 日、王立協会の会合に赴いた彼は、数種のトウモロコシの実物とその穀粒を協会の面々に披露し¹⁶、また、その 2 週間後の同年 12 月 31 日に開催された会合では、ニューイングランドで栽培されているトウモロコシに関する報告を読み上げている。それは、トウモロコシの穂の形状、背丈、耕作の時期及び方法、トウモロコシを原材料にしたパンおよびビールの作りかたなどに関して具体的に述べられたものであり¹⁷、その原稿は協会の『登記簿』(*Register Book*)に登録された¹⁸。協会内部の混乱によりその出版こそ大幅に遅れたものの、英語でもっとも早い時期にトウモロコシの自然誌ナチュラリスティクを書き残したのは、トウモロコシを「我らの」穀物と宣言したマサチューセッツ植民地初代総督の息子であった。

ウィンスロップの記事は、自然誌によるトウモロコシの囲い込みに先鞭をつけ、以後のトウモロコシ言説に一定の方向性を与えることになる¹⁹。父が「我らのインディアンコーン」という聞こえの良いフレーズを用いたのとは対照的に、息子はトウモロコシに対して観察に基づく分析的なアプローチを展開した。そうすることで、静かに、しかし、確かに、新大陸原生の穀物は「我らの物」になってゆく。

18世紀に至り、こうした自然誌的アプローチを継承するのは、コットン・マザーである。彼の代表作『クリスチャン・フィロソファー』の第26エッセイ「植物について」(“Of the Vegetables”)では、トウモロコシの粒の色が他の粒に伝染する、今日では交雑と呼ばれる現象が報告されているが、見逃さないのはそこに「我らのインディアンコーン (our Indian Corn)」というフレーズが紛れ込んでいることである。

私の隣人は、畑に一列の盛り土をこしらえて、そこに我らのインディアンコーンを植えた。ただしそこには、赤や青の穀粒のものを植え、畑の残りの部分にはもっとも一般的な色である黄色の穀粒のものを植えた。この列のトウモロコシは、風上の側に向かって隣接する4列目までのトウモロコシ全と、5列目のトウモロコシのある部分、そして僅かではあるが6列目のトウモロコシにも、影響を与えた。それらの列の穀粒の色は、盛り土をしたところに植えた穀粒の色と似たようなものになったのである。しかし風下の側では、7列目あるいは8列目にまでそのような色の変化がみられ、より微小な影響はさらに遠くの列にもおよんだ。²⁰

交雑に関する報告は、その3年後の1724年に刊行された『フィロソフィカル・トランザクションズ』の第27巻にも収められているが、そこにもやはり「我らのインディアンコーン」というフレーズが出現する。著者であるマサチューセッツの法律家および政治家で、マサチューセッツ最高裁判所 (Superior Court of Massachusetts) の判事も勤めたポール・ダドレー (Paul Dudley) はその記事を、「我らのインディアンコーンは、この上なく実りの良い穀物である」と書き始め、「インディアンコーンといえば、ぜひとも注意を促したいのは、その穀物が発育する際の驚くべき現象について、つまりは、穀物を植えた後における、色の交換および混合についてである」²¹と続けている。そしてその直後には、マザーの事例と類似した観察が記録されている。

自然誌的な事例報告と同居する「我らのインディアンコーン」という言い回しは、英領北米植民地人がトウモロコシについて語るときの常套表現となっていた。はじめて英語で用いられてから約100年の間に、北米植民地居住者にとってのトウモロコシの意義は、食糧から自然誌的観察の対象へと変遷する。しかしそのなかで、「我らのインディアンコーン」という聞こえの良い呼称だけは形を変えないまま保持される。ならばこのフレーズは、この時点におけるトウモロコシ言説の指向性を代弁しているのではないか。元来はマイルスと呼ばれていた穀物をインディアンコーンと呼びなおし、さらにそこに「我ら」を冠した表現が継続的に用いられたことは、アングロ・アメリカのトウモロコシに対する強力な、そして持続的な占有欲を表明しているはずである。

トウモロコシをめぐる言説は、「我らのインディアンコーン」という宣言を軸として、ひとつの閉じられた空間を形成していた。そしてそこでは、本来なら観察に基づいて書かれるはずのトウモロコシをめぐる自然誌的な記述が、観察なしのまま再生産されてゆく。こ

ここでその例をみておこう。既に触れた『フィロソフィカル・トランザクションズ』に掲載されたウインスロップ・ジュニアの記事は次のように始まる。

The Corn, used in New England before the English Planted there, is called, by the Natives, Weachin, known by the name of Maijs [sic] in some Southern parts of America. ...

The ear is for the most part about a span long, composed of several, commonly 8 rows of Grains, or more according to the goodness of the Ground; and in each row, usually above 30 Grains. Of various colors as Red, White, Yellow, Blew, Olive, Greenish, Black, specked striped & co. sometimes in the same field, and the same Ear. But the White and Yellow are the most common.[...]

The Stalk growth to the height of 6. or 8. feet; more or less, according to the condition of the Ground, or kind of seed. The Virginian growth taller than that of New England.²²

1760年、この記述をほぼそのまま借用した「報告」が書かれた。ウィリアム・バーク (William Burke) ——かのエドモンド・バーク (Edmund Burke) のいとこ——の著書『ヨーロッパ人によるアメリカ移住に関する報告』である²³。

①This plant, which the native Americans called Weachin, is known in some of the Southern parts of America by the name of maize. ②The ear is about a span in length, consisting of eight rows of the corn, or more, according to the goodness of the ground, with about thirty grains in each row. On the top of the grain hangs a sort of flower, not unlike a tassel of the silk, of various colours, white, blue, greenish, black, speckled, striped, which gives this corn as it grows a very beautiful appearance... ③The stalks grow six or eight feet high, and are of a considerable thickness²⁴.

一見してわかるように、バークの記述はウインスロップ・ジュニアの記述に酷似している。具体的には、バークからの引用における下線部①から③が、ウインスロップ・ジュニアから引用した3つの段落それぞれに対応している。

ここで本稿は、バークの無断引用を断罪しようとしているわけではない。実際バークは、同書の序文において、「アメリカで何が起こったかについて適切な知識を得、今現在のアメリカがどのような状態にあるのかについて知るためには[中略]莫大な量の文献に目を通すことが必要である」²⁵と述べ、彼の『報告』が実体験に根ざしたものではなく、別の書物に書かれたことに関する報告、いわば、報告の報告であることを暗に認めている。

むしろ注目すべきは、約100年前にその原型が書かれたウインスロップのトウモロコシをめぐる記述が、「今現在のアメリカがどのような状態にあるのか」に関する知識として流通してしまっている、ということである。このことは、18世紀半ばのトウモロコシ言説が、

トウモロコシのトウモロコシらしさを、事物と言葉の照応ではなく、言葉と言葉の照応によって紡ぎ出していたことを示唆する。北大西洋兩岸を跨いだトウモロコシをめぐる言説空間は、「我らのインディアンコーン」について語るためのコンヴェンションを生成し、これが静かに踏襲されることで、トウモロコシは以前より増して「我ら」の穀物になってゆく。「我らのインディアンコーン」という聞こえの良いフレーズが再生産されることで、新大陸原生の穀物に対するアングロ・アメリカの領有権は自明化し、強化されていったのである。

あらためて指摘するまでもなく、これまで考察してきた17世紀後半から18世紀半ばまでの時期における「我ら」とは、地理的にはアメリカ大陸に住みながら政治的にはイギリスに帰属していた「英領北米植民地人 (British American)」を指す。しかし、18世紀の後半に至り、ひとたび本国と植民地の政治的な関係が揺らぎ始めると、「我ら」の意義は更新を余儀なくされる。「我ら」＝「英領北米植民地人」という等式から British が削ぎ落とされ、新たに「我ら」＝「アメリカ人 (American)」という等式が出来するのである。こうした領有する主体の揺らぎが、従来のトウモロコシ言説の編成に何らかの変化をもたらしたであろうことは、想像に難くない。一旦閉じられたトウモロコシを巡る言説空間の扉は、ふたたび開かれるのである。そしてその扉を開くのは、他ならぬベンジャミン・フランクリンであった。

2. トウモロコシ論争とフランクリンの腹話術

印紙条例が発布されて間もない1765年12月23日、ロンドンの日刊紙 *Gazetteer and New Daily Advertiser* に、ラテン語で「祖国の擁護者」を意味する筆名、「ウィーンデックス・パトリーアエ」(Vindex Patriae) を名乗る人物による投稿記事が掲載された。そのねらいは、「代表なくして課税なし」という、植民地人たちが掲げるスローガンの不当性を訴えるところにあった。

本稿の目的からは大きく外れるため、この論争に関与した3者の主張の政治史的な意義に関する評価は避ける。むしろ以下では、この論争に、イギリス本国人からの非難の対象として、唐突に「インディアンコーン (Indian Corn)」という記号が導入されたという事実が目じたい。

初めに指摘しておかなければならないのは、この論争の中で、アメリカを代弁する機能が付与される「インディアンコーン」という記号が、イギリス政府の立場を代弁するパトリーアエによって、課税権の有無をめぐる論戦の言説空間に持ち込まれた、という点である。結果的に、トウモロコシを揶揄しようとした言説は、トウモロコシ＝アメリカという一枚岩的な表象の成立に加担してしまう。これは、「ピューリタン」や「クェーカー」などといった呼称がもともとは蔑称であったことや、そもそも「アメリカ人」(American) という呼び名でさえイギリス人の間で一般化したものだったという事実²⁶と呼応する。「インデ

「イアンコーン」は、印紙税法をめぐる議論のさなかで、本国人からの非難の対象となることにより、英領北米植民地人の穀物から「アメリカ人」の穀物へと姿を変えてゆくのである。

投書においてパトリーアエは、「彼ら（「アメリカ人」たち）を本当に突き動かしているのは、独立するという野望なのだ」と断じた上で、突如としてトウモロコシから作る料理の消化の悪さを言い立てる。

ここ〔イギリス〕にはトウモロコシの質についてよく知っていて、トウモロコシはアメリカ人に、口当たりの良い、つまり、たやすく消化できる朝食を決して供しないと断言できる人々がたくさんいる。彼らは、もし奴隷たちが思うままに出来るのであれば、進んで食べはしないであろうトウモロコシについて、あれこれと自慢するが、それは断じてアメリカ人が正直であることを示す証拠ではない。²⁷

これに対し、当時ロンドンに滞在していたベンジャミン・フランクリンは、「ホームスパン (Homespun)」という筆名で、年が明けた 1776 年 1 月 2 日に反論の口火を切る。

どうか、ひとりのアメリカ人である私に、先の、問題の件についてまったくもって無知である紳士〔パトリーアエ〕に、次のことを告げさせてください。トウモロコシは概して、世界で最も口当たりが良く、健康に良い穀類のひとつなのです。ローストした緑の房など、それは筆舌に尽くし難いほどに美味なのであります。²⁸

この件は、トウモロコシはきちんと調理すれば「ヨークシャー・マフィンよりも美味しい」と結ばれている。ホームスパンは、ペンネームさながらに、アメリカ産のトウモロコシを擁護するのである。彼は、その約 2 週間後の 1 月 15 日付けの同紙においても、アメリカでは奴隷にトウモロコシを与えていることを認めつつ、それは消化にも体にも悪いからではなく、むしろ消化にも体にも良いからだ、という反論を展開している。

確かに私たちは、自らトウモロコシから作った食べ物を食べるだけでなく、奴隷たちにも与えています。しかしそれは、あなたがお考えのように、トウモロコシが「消化にも体にも良くない (“indigestible and unwholesome”）」からではありません。むしろ、トウモロコシを原材料とした食べ物は、奴隷たちの健康を保ち、彼らを強靱かつ元気にするから、つまりは、彼らの健康状態を私たちが要求する労働をやり遂げるのに適した状態にするからこそ、彼らに与えられているのです。²⁹

同年 1 月 16 日には、この論争に、アメリカ人の側に立つ J. B. なる筆名の投稿子が参戦する。次の引用をみると、彼もパトリーアエが非難したふたつの点について、ホームスパン

とまったく同じ観点から反論していることがわかる。

「トウモロコシから消化によい朝食が作られることはない」という彼 [パトリーアエ] の断言は、断じて彼が正直であることの証拠ではない。というのも、よく知られているように、トウモロコシの実は、適切に挽き、殻を取り、茹でれば、消化に良くて栄養のある食事となるのである。そのために、そうした食事は、貧富の別を問わず、子供たちに与えられるのである。また、私が信ずるところでは、ウィーンデックス・パトリーアエこそ、トウモロコシのおいしさに疑いを挟んだ最初の人物である。もっとも、「アメリカ人はトウモロコシの食事を奴隷たちに供する」、と彼が述べるとき、彼は自家撞着に陥っている。それが消化に悪く、かつ、消化不良の結果もたらされる疾患を招きうるのであれば、どうして主人たちは、奴隷たちの体が壊れてしまうほどまでに、奴隷たちに対して無頓着でいられるというのだろうか？³⁰

ここで、1 [Patriae] 対 2 [J.B. + Homespun] の様相を呈したトウモロコシ論争の争点を整理しておこう。J.B.とホームスパンは、パトリーアエの議論に抗する、ふたつの論点を共有している。それは、トウモロコシは適切に調理を加えれば、決して消化に悪くはない、という点と、トウモロコシを奴隷に食べさせるのは、決してその質が悪いからではない、という点である。これだけを見るならば、アメリカの側に立つ2人の筆者は、パトリーアエの攻撃を同じように解し、同一の視点から反論していることがわかる。

ところが、奇妙な不一致がひとつある。ホームスパンは反論の口火を切った1月2日の投稿の冒頭で次のように述べている。

VINDEX PATRIAE, a writer in your paper, comforts himself, and the India Company, with the fancy, that the Americans, should they resolve to drink no more tea, can by no means keep that resolution, their Indian corn not affording “an agreeable, or easy digestible breakfast.”³¹

なるほど、「トウモロコシは消化に悪いから茶が必要、だから英国経由でアメリカに輸入される茶の不買運動は成立し得ない」という非難は、トウモロコシと、それを好んで食べるアメリカ人とを、ひとまとめに揶揄する、よくできた理屈ではある。しかし、問題は、実際にパトリーアエはこうしたことを一切言っていない、という点にある。正確な議論を期すために、前年12月23日付パトリーアエの記事から関係する部分をもう一度原文で引用し、その論理を整理しておこう³²。

④The sugar, teas, and other commodities they daily buy from St. Eustatia, and Mont Christi, in particular, are too convincing proofs, that they have no tenderness for their

mother country. [...]

⑤It is of very small importance to our East-India Company, whether the continental Americans drink tea or not. The Danes and Dutch will suffer most by that resolution, but our East-India Company will never find their sales decrease by those means. ⑥And there are many here so well acquainted with the quality of Indian corn, as to be able to say, that it never can furnish the Americans with an agreeable, or an easy digestible [sic] breakfast. Their boastings of a corn, which their slaves do not chuse [sic] to eat, if they could help themselves, afford us no evidence of American candour.

下線部④での *Patriae* の主張をまとめると、「アメリカは、そもそも、母国すなわち東インド会社から茶を買っているわけではなく、そのことは母国に対する思いやりが欠けている証拠だ」、ということになる。これをうけて、下線部⑤では、「アメリカ人が茶を飲んでも飲まなくても、東インド会社にはなんらの打撃も及ぼさない」、とされる。そのすぐあとに続くのが下線部⑥の「インディアンコーンは消化に悪い」という一節である。こうしてみると、下線部④から⑥の間に、「消化に悪いから茶が必要、したがってイギリス製品の不買運動は成立しない」、という明確な因果関係は一切書き込まれていないことがわかるだろう。むしろ、パトリアエの主張するところでは、アメリカ人はそもそも母国から茶を買っていないのであるから、トウモロコシが消化に悪いこととアメリカがイギリスから茶を買わないこととの間に、一切の利害関係は発生しないのである。

ホームズパンは、「消化に悪いトウモロコシには茶が必要であるから、英国経由でアメリカに輸入される茶の不買運動は成立し得ない」という、パトリアエの非難に憤慨し、反論している。しかしパトリアエの投書には、そもそもそうした議論は存在しない。では、なぜこのようなことが起こるのだろうか。考えられるのは、ホームズパンの名を借りたフランクリンが、論争相手の見解をいわば創造的に要約し、その論点を捏造したうえで、自らの反論を展開している、という見方である。これは、上で見たように、ホームズパンとふたつの反論のポイントを共有していた J.B. が、トウモロコシの消化の悪さと茶の不買運動の因果関係には一言も触れていないことによって裏付けられるだろう。フランクリンの創造的な要約、あるいは、意図的な誤読は、トウモロコシ料理を食べる時に茶が必要とされるのか否か、という問いを生じさせる。当然この問いは、北米植民地が自立してやっつけていけるのか、それとも本国の助けを必要とするのか、という問いと、完全に重なり合う。こうしたフランクリンの周到な仕掛によって、記号としての「インディアンコーン」は、イギリスを代弁する「茶」という記号を伴い、アメリカの隠喩として立ち現れるのだ。フランクリンは、論争相手の声を借りつつ、いわば腹話術的に、トウモロコシをアメリカ人の占有物とすることに成功しているのである。

パトリアエ は、1月24日付の投稿を、「ホームズパン氏と J.B.氏は、アメリカに関する論争をトウモロコシの質に関する論争にすりかえようとしている」、と書き始める³³。ト

ウモロコシ論争は、本国の植民地に対する課税権をめぐる論争をしのぐほどに過熱したのだ。そして、こうした批判と反論の応酬が過熱した分だけ、「インディアンコーン」に冠せられる「我ら」から、本国人たちが排除されてゆき、トウモロコシはアメリカ、またはアメリカ人を代弁する力を強めていったはずである。

3. トウモロコシはいかにしてアメリカの穀物になったか

印紙税法によって重税を課されたアメリカの新聞は、もはや植民地居住者を「英国臣民 (British Citizen)」ではなく、「アメリカ人 (American)」と呼んで憚らなくなったといわれる³⁴。印紙税法が植民地人の間に潜んでいたアメリカ人意識を覚醒させ、逆説的にアメリカが独立へといたる契機を提供したと考えるならば、印紙税法をめぐる論争が交わされるなかで、フランクリンの手によってアメリカを表象するアイコンへと姿を変えた「インディアンコーン」は、そうしたアメリカ人意識のもっとも早い時期の産物であり、アメリカのナショナリズムの原形を生成しかつ強化する記号表現であったともいえるだろう。

しかし、ここにフランクリンが関わったあらゆる論争において考慮しなければならない疑惑がひとつ、残されている。つまり、ポリリー・ベイカー (Polly Baker) をめぐる一連の論争³⁵と同様に、この論争もフランクリンのでっち上げであり、論争の口火を切ったパトリーアエも、実はフランクリン本人であったのではないか、という疑惑である。

そもそも、大西洋の兩岸には、トウモロコシに対する認識の断絶があった。これを端的に表明しているのは 1755 年にロンドンで出版されたサミュエル・ジョンソンの『英語辞典』である。同辞典は「インディアンコーン (Indian corn)」を、「イングランドでは珍品として栽培されたが、アメリカでは居住者たちの主食であるので、細心の注意を払って殖産されている」³⁶と定義している。また、上でも触れた、1760 年に同じくロンドンで出版されたウィリアム・パークの『報告』にいたっては、トウモロコシという穀物自体が「イングランドではさほど広く知られてはいない」³⁷と述べている。パトリーアエは、アメリカでは人がトウモロコシを食べるということを前提に議論を切り出すが、そのこと自体がイングランドでは一般的ではない穀物に対するひとつの知識なのである。さらに、論争の過程でパトリーアエは、アメリカ人がトウモロコシを奴隷に食べさせていること、トウモロコシは下ごしらえしたらすぐに食べなければならないことなど、きわめて具体的な知識を、自ら持ち出している³⁸。イングランドでは「珍品」であり、さほど市民権を得ていない穀物に関する知識は、パトリーアエがトウモロコシまたはアメリカに対する強い好奇心の持ち主であったことばかりではなく、パトリーアエが実はフランクリン自身であった可能性をも、示唆する。

パトリーアエはトウモロコシに対して完全に無知なのではない。むしろ彼は、トウモロコシについて、その批判を展開できるほどに知悉しており、また、論争相手のホームスパンにとって望ましい程度に、トウモロコシについて誤解しているのである。そしてその誤

解は、論争の過程でホームスパンによって解かれてゆくのである。こうしてみるなら、トウモロコシをめぐる二人の議論自体が、はじめから作り物であった可能性も十分指摘できるだろう。すると、パトリーアエが、トウモロコシの攻撃を始めるにあたって、「周囲にはトウモロコシについて知悉しているものがたくさんいる」、と述べていることは、一種の偽装にも見えてくる。本当は彼自身がトウモロコシのことを良く知っていたのではないか。つまり、パトリーアエはフランクリンだったのではないか。

しかし、パトリーアエがフランクリン本人であったと仮定しても、疑問は残る。なぜ、フランクリンは、自らパトリーアエとして書いた記事に、「消化に悪いから茶が必要、よってイギリス製品の不買運動は成立し得ない」、という理屈をあえて書き込まなかったのだろうか。これをあらかじめ書き込んでおいたほうが、論争は圧倒的にスムーズに進行したのではないだろうか。だとするとフランクリンは、自ら捏造した論争相手の言い分の中にその理屈を「仕込む」ことを忘れたのだろうか。さらに彼は、「仕込むのを忘れたこと」自体を忘れてしまい、存在しない論点に対して反論を展開しているのだろうか。

今日、この論争が完全な捏造であったのか否かについて、確定的な判断を下すのはきわめて難しい。しかし、ありもしない論点にアメリカ人の側から「反論」するフランクリンの姿が、この論争に一種の虚構性を付与していることだけは、確かである。論争相手のパトリーアエがフランクリン本人であったにせよそうでなかったにせよ、ホームスパンを名乗るフランクリンは、「トウモロコシは消化に悪いから茶が必要、よってイギリス製品の不買運動は成り立たない」という、よくできた理屈を論争のどこかの段階で拵えていることに変わりはない。

トウモロコシがアメリカあるいはアメリカ人の隠喩として作動し始める枠組を提供した論争に、フランクリンはある種の虚構性を混入させた。こうして、トウモロコシが、最も早い時期のアメリカ人意識を、つまり、アメリカのナショナリズムの原形を掻き立てる、フランクリン流でち上げの素材とされたとき、閉じられていたトウモロコシを巡る言説空間の扉はふたたび開かれ、トウモロコシ言説の再編成は緒に就くのである。

おわりに

独立戦争のさなかの 1780 年 3 月 5 日、当時大使としてフランスに滞在していたフランクリンは、後に合衆国初代大統領に選出されるジョージ・ワシントン (George Washington) に宛てて、次のように書き送った³⁹。

私はまもなく現場から身を引かなければなりません、あなたは生きて我が国 (our country) の繁栄を目撃するでしょう。戦争が終わってしまえば我が国は、驚くべき程に、急速に栄えるでしょうから。芽吹いたばかりのトウモロコシ畑 (a field of young Indian corn) のようなものです。長い晴天と日光によって衰弱し、変色した、弱々し

い状態にあって、雷に伴う一陣の風や突風、雹、雨によって完全にだめになってしまふように見えるけれども、いったん嵐が過ぎ去ってしまえば、トウモロコシの若芽は、新たに生気を回復し、倍增した活力で芽吹き、その畑の持ち主だけではなく、それを観察する全ての旅行者の眼を楽しませるでしょう。

フランクリンは、独立戦争の混乱を経た合衆国を、荒天を生き延びるトウモロコシ畑の隠喩で語っている。ここでの「我が国 (our country)」が、「芽吹いたばかりのトウモロコシ畑 (a field of young Indian corn)」と、交換可能なフレーズであることに多言は要さない。入植直後からトウモロコシの領有に対する欲望を剥き出しにしてきたアングロ・アメリカは、政治的独立を経る頃に至ると、ベンジャミン・フランクリンによって、ついにトウモロコシそのものとして語られる。こうしてフランクリンは、アングロ・アメリカのトウモロコシに対する領有権の更新を、ひとまず完結させるのである。

アメリカの隠喩としての「トウモロコシ」は、パトリーアエとホームスパンの論争においては「茶」と共に現われる。また、フランクリンのワシントン宛書簡において、「トウモロコシの若芽」は、「芽吹いたばかりのトウモロコシ畑」を荒らす「突風」や「雹」などといった荒天と共に現われる。アメリカの隠喩としての「トウモロコシ」は、常にイギリスの隠喩とセットで立ち上がるのだ。アメリカが政治的に独立する頃、トウモロコシは、常にその対立項を引き合いに出しながら、ついにアメリカを一枚岩的に表象する機能を備えるのである。そのプロデューサーとしてフランクリンが担った役割は記憶されるべきであろう。移民直後の植民者を栄養面で助けたトウモロコシは、独立に至るまでの間に、アメリカという国家のありかたを表明する記号としての力を獲得するのである。

注

- 1 本稿は日本アメリカ文学会第43回全国大会（2005年10月15日）における発表原稿に大幅な加筆・修正を加えたものである。当日司会をご担当くださった大井浩二関西学院大学名誉教授からは、有益な情報をご提供いただきました。記して謝意を表します。
- 2 今日、「トウモロコシ」に相当する語は、アメリカ英語では corn、イギリス英語では maize あるいは Indian corn である。後に本文で触れるとおり、corn はもともと穀物全般を指したが、アメリカにおいては Indian corn の省略形の corn がトウモロコシを意味するようになった。*Longman Advanced American Dictionary of Contemporary English* (電子辞書 [Casio XD-H7600] 版) は、Indian corn を corn の古用法であるとし、今日では様々な色の殻で覆われている穀物 (corn with kernels of different colors) をさすとしている。オンライン版 *Encyclopaedia Britannica* も同様に、現在のアメリカで Indian corn といえば、とりわけ様々な色の殻が混ざり合った、収穫時の装飾用に用いられる種子を指す、としている。<http://original.britannica.com/eb/article-9026316>, Aug. 6, 2008)。しかしながら、本稿では、17世紀から18世紀の北大西洋沿岸において、トウモロコシが主として Indian corn または maize と呼ばれていたこ

- とを考慮し、「インディアンコーン (Indian corn)」を、「トウモロコシ」の訳語として、トウモロコシ一般を総称的に表す語として用いる。なお、本文中では「インディアンコーン」と「トウモロコシ」の2語を同義語として扱うこともここに注記しておく。なお、トウモロコシに関する一般的な研究としては C. Wayne Smith, Javier Betran, and E.C.A. Runge (eds.), *Corn: Origin, History, Technology, and Production* (Hoboken, N.J.: J. Wiley, 2004); 戸澤英男『トウモロコシ—歴史・文化、特性・栽培、加工・利用』(農文協 2005) を参照。
- 3 ここでコロンが「あの」と述べているのは、同年 10 月 16 日付の日誌において、すでに、まだ見ぬ穀物として「^{パニッ}とうもろこし」が言及されているからである。『コロンブス航海誌』(林屋永吉訳 岩波文庫 岩波書店, 1978), p.50.
 - 4 Ibid, p.84.
 - 5 バルトロメ・デ・ラス・カサス『インディアス史 1』(大航海時代叢書 第 II 期 21 長南実・増田義郎 注訳 岩波書店, 1981), p.460.
 - 6 Noah Webster, *An American Dictionary of the English Language* (New York, 1828).
 - 7 “Some English seed they sew, as wheat and pease, but it came not to good, eather by the badness of the seed, or lateness of the season, or both, or some other defecte. [A]nd the hart of winter over. Afterwards they (as many as were able) began to plant ther corne, in which service Squanto stood them in great stead, showing them both the maner how to set it, and after how to dress and tend it.” William Bradford, *History of Plymouth Plantation 1620-1647* (Boston: Published for the Massachusetts Historical Society, 1912), vol.I, pp.214-16.
 - 8 旧英ブッシェル (1 ブッシェル=35.24 リットル) で換算すると、21144 リットルに相当する。
 - 9 ダナ・R・ガバッチャ『アメリカ食文化—味覚の境界線を越えて』(伊藤茂訳 青土社、2003 年), p.43.
 - 10 “Chickatabot came with his Sanoppes & Squaes, & presented the Gouvernor with a hhd. of Indian Corn.” John Winthrop, *The Journal of John Winthrop, 1630-1649* (Eds. Richard S. Dunn, James Savage and Laetitia Yeandle. Cambridge, MA: Belknap P of Harvard UP, 1996), p.47.
 - 11 Qtd. in Elbridge S. Brooks, *Stories of the Old Bay State* (New York, 1899), p.45.
 - 12 たとえば、John McWilliams, *New England’s Crisis and Cultural Memory: Literature, Politics, History, Religion, 1620-1860* (Cambridge: Cambridge UP, 2004), p.26; Ian K. Steele, *Warpath: Invasions of North America* (New York: Oxford UP, 1994), pp.86-87.
 - 13 ガバッチャ、『アメリカ食文化』, p.53.
 - 14 John Winthrop, Jr., “The Description, Culture, and Use of Maiz. Communicated by Mr. Winthrop,” *Philosophical Transactions* XII (1678), pp.1065-69. この記事の元になった書簡およびウインスロップ・ジュニアの協会への送付品に関しては、次を参照。Thomas Birch, *History of the Royal Society of London* ([1756-57] Bruxelles: Culture et Civilisation, 1968), vol.II, pp.418-21; 499; Raymond P. Stearns, “John Winthrop and His Gifts to the Royal Society,” *Transactions* (Publications of the Colonial Society of Massachusetts) XLII (1952-56), pp. 206-32.
 - 15 ウインスロップ・ジュニアの伝記については、次を参照。Robert C. Black, *The Younger John Winthrop*

- (New York: Columbia UP), 1966.
- 16 Birch, *History of the Royal Society*, vol.I, 162.
- 17 なかでも、ビールの醸造法は協会の興味をひきつけ、協会の会合での「実演 (experiment)」を促す声もあがったといわれる。Stearns, *Science in British Colonies of America*, p.128.
- 18 Birch, *History of the Royal Society*, vol.I, p.168.
- 19 記事が同誌に掲載される経緯と、その内容に関する詳細な分析については、以下を参照。Fulmer Mood, “John Winthrop, Jr., and Indian Corn,” *New England Quarterly* 10 (1937), pp.121-33; Raymond P. Stearns, *Science in British Colonies of America* (Urbana: U of Illinois P, 1970), pp.126-28; 佐藤憲一「書簡から記事へ—ニューイングランド自然誌の生成論」『アメリカ文学』(日本アメリカ文学会東京支部会編)66 (2005), pp.1-8.
- 20 Cotton Mather. *Christian Philosopher*. ([1721], Ed. Winton L. Solberg, Urbana: U of Illinois P, 2000), p.131.
- 21 Paul Dudley, “Observations on Some of the Plants in New England [...]” *Philosophical Transactions* XXVII (1724), p.198. なお、ダドレーの詳しい経歴については Stearns, *Science in British Colonies of America*, pp.455-72 を参照。
- 22 Winthrop, Jr., “The Description,” p.1065. 議論の性質上、引用は原文のままとする。
- 23 William Burke. *An Account of the European Settlement in America in Six Parts* (London, 1760), p.164.
- 24 以下、引用文中の下線は全て筆者による。
- 25 Ibid, p.A2.
- 26 Gordon S. Wood, *The Americanization of Benjamin Franklin* (New York: Penguin, 2004), p.113.
- 27 Vindex Patriae, “To the Printer,” *Gazetteer and New Daily Advertiser* ([London], Dec.23, 1765), np.
- 28 Homespun [Benjamin Franklin], “To the Printer,” *Gazetteer and New Daily Advertiser*. ([London], Jan 2, 1766), np; rpt. in Leonard W. Labaree (ed.), *Papers of Benjamin Franklin* (New Haven: Yale UP, 1969), vol.XIII, p.7.
- 29 Homespun [Benjamin Franklin], “To the Printer,” *Gazetteer and New Daily Advertiser* ([London] Jan.15, 1766), np; rpt. in Leonard W. Labaree (ed.), *Papers of Benjamin Franklin* (New Haven: Yale UP, 1969), vol.XIII, p.46.
- 30 J. B., “To the Printer,” *Gazetteer and New Daily Advertiser* ([London] Jan.16, 1766), np.
- 31 Homespun, “To the Printer”(Jan.2, 1776), p.7. 以下、論争記事からの引用は原文の論理構造を保持するために原文のままとする。
- 32 Vindex Patriae, “To the Printer,” *Gazetteer and New Daily Advertiser* ([London] Dec.23, 1765), np.
- 33 Vindex Patriae, “To the Printer” (Jan.24, 1766), np.
- 34 David A. Copeland, *Debating the Issues in Colonial Newspapers: Primary Documents on Events of the Period* (Westport, Connecticut, Greenwood P, 2000), p.193.
- 35 ポリー・ベーカー事件とフランクリンの捏造癖に関しては、Max Hall, *Benjamin Franklin & Polly Baker: The History of a Literary Deception* (Pittsburgh: U of Pittsburgh P), 1990、および、巽孝之『ニューアメリカニズム』(青土社, 1995年), pp.108-46 を参照。
- 36 *A Dictionary of the English Language* ([1755]Tokyo: Yushodo, 1983).

³⁷ Bruke, *Account*, p.164.

³⁸ Patriae, To "To the Printer." (Jan.24, 1766), np.

³⁹ *Papers of Benjamin Franklin*, vol. XXXII, p.56.